

# 美しい清流 紛争で汚染

ゆったりとしたザバ川の流れを受け入れ、ドナウ川はさらに水量を増してかなたまで続く。ローマ帝国の時代から川の合流点を見下ろす丘の上に建つベオグラード要塞から見下ろすと、ここに暮らす人々と川の大切な関わりが見えてくる。

ドイツに源を発し、黒海に注ぐ欧州第2の川ドナウ。かつてここを往來した貨物船は観光クルーズ船に、川沿いの倉庫は現代的なカフェやレストランに姿を変えた。しかし、ドナウ川は今もセルビアの人々の暮らしの間にある。

## 忘れぬ記憶

カップルや家族が夜遅くまで語り合う川べりのレストランの売り物の一つは新鮮な魚料理。食卓に供する直前に地元の川漁師らが近くの川で取ってきたものだ。

「川の恵みは市民にはなくてはならないものだ。その川の水やここにすむ生き物に目に見えない汚染が広がっているかもしれない。でも、誰もそれを分かっていない」。化学が専門のベオグラード大准教授、ウラジミール・ベスコスキー(38)が、流れを見詰めながらつぶやく。

「ベオグラードで生まれ、幼いころから川で生き物を追って遊んだ。今とは比べものにならないほどきれいで、たくさんの生き物がいた」と言うベスコスキーは、1999年のあの日のことを今も鮮明に覚えている。

3月24日、遠くから響く飛行機の音、さく裂する爆弾の音と衝撃。立ち上る黒煙。ベスコスキーは大学近くのアパートの一室で、おのきながら見詰めていた。爆撃された製油所は何日にもわたって燃え続け、黒煙が空を埋めた。

民族対立に端を発したコンボ紛争で北大西洋条約機構(NATO)はユーゴスラビアを空爆、セルビアの工場や発電所、石油精製施設などは徹底的に破壊された。約3カ月続いた爆撃の後、ドナウには「有毒の遺

## 有害物質 実態解明へ研究



産と呼ばれる、目に見えない汚染が残された。発電所や工場からはポリ塩化ビフェニール(PCB)などの有害化学物質が大量に川に流れ込んだのだ。

## 調査不十分

空爆直後、国連は化学物質汚染を確認するため、調査チームを派遣す

る。汚染の深刻さゆえに「ホットスポット」と称された場所の多くはドナウ川に面していた。

高濃度PCBを含む変圧器などは撤去、処理された。しかし、工場廃水などに含まれる有害物質に紛争の遺産が加わり、汚染は今も続いている。

後にベオグラード大学の研究チ

ムは、首都周辺の魚に高濃度のPCBなどが蓄積していることを突き止めた。しかしサンプルが少なく、実態は分からないままだった。

2012年10月、ベオグラード空港に降り立った2人の日本人研究者が、ベスコスキーと固い握手を交わした。

大阪大特任教授の中野武(63)は、

「研修で来者から、紛争居ても立って言う。セルビ性を探ろうと究センターのセルビアを訪察や試験的なった。

セルビア政は前向きだ。A」と科学技術国際科学技術援を得て、汚援を目指してい

10月半ばのの南東約15の川で調査を姿があった。

ドナウ川かこも爆撃で破壊スポットの(一)鉱山は再建さも続いている。

「この川はる」。鉱山が黄色に濁った川汚れた真つ黒が合う場所に立い汚泥は川岸には魚の姿はお

「これだけ汚のに、水も泥が汚染が激しい掛ける竹峰。の川もやがて川を汚し続けだが、われわれ分析機器さえも

「この川はる」。鉱山が黄色に濁った川汚れた真つ黒が合う場所に立い汚泥は川岸には魚の姿はお



結婚記念日を祝い、ワインで乾杯する夫婦。市内には川を眺めながら食事を楽しめるレストランが数多くあり、店主自らが漁に出るこの店には、取れたての魚を自営に大勢の客が訪れていた(ベオグラード(共同))



# 世界

# 物語



「この川はる」。鉱山が黄色に濁った川汚れた真つ黒が合う場所に立い汚泥は川岸には魚の姿はお

「この川はる」。鉱山が黄色に濁った川汚れた真つ黒が合う場所に立い汚泥は川岸には魚の姿はお